

浄土真宗を学ぶについて心がけねばならないことは、その聞法がたんに自分の知識をひろめたり、自分の心のやすらぎを求めるものとして、自分自身のための栄養補給になつてはいけないと言ふことです。真宗を学ぶという事は、決して自分を強くすることではありません。聞法することが、自分を裝飾し、自分を武装することになつてはなりません。真宗を学ぶと言ふことは、自分が強くなるのではなく、かえつてそのことによつて、今までの自分がつきくずされてゆき、うちこわされていくという事でなければなりません。今までの色々な理屈を学んで強くなつていた自分、そしてまた様々に働いて、それなりに地盤と自信を身につけていた自分が、念仏の教えを通して、何もかもつきくずされてゆくのです。自分が大事にしていくこの世の宝のむなしさと、自分の心のみにくさを、身にしみて深く思い知つてゆくのです。

お念仏のしずく



「聞法の要心」

だから浄土真宗を学ぶということは、その教えを聞くことを通して、それに呼びさまされ、それにめざめ、それにみちびかれて生きてゆくことであります。真宗における信心とは、酔うことではなくて、眼をさますことなのです。自分の心の暗さやみにくさ、人の世の悲しさやきびしさに、眼をつむつて適当に妥協するのではなくて、さめた眼を持って、それらの人生の現実の姿を正しく見つめてゆくのです。(乃至)自分のありのままの姿を思い知り、自分自身が突きくずされ、打ちくだかれていくと言ふことは、とても厳しいことでもあります。しかしながら、ここにこそ、まさしく仏の生命と一つになつた新しい生命の誕生がめぐまされて来るのです。真宗を学ぶと言ふことは、自分を裝飾し、武装することではなくて、その聞法により、念仏によつて、今までの自分が、その根底から崩壊してゆくことなのです。

『この道をゆく』



呉まで来られたそうです。上山田小学校の男子生徒は、善立寺というお寺に疎開しており、そこから郷野小学校へ通つたようですが、その時の生活も、本当によく覚えておられて、私にもお話し下さいました。善立寺の住職松林行圓先生は十一月の当寺報恩講にお越し下さいます。紙面の都合上、詳細は別に譲りますが、大変な時代だったことを、聞かせて頂く度に、非戦の思いを新たにいたします。そんなことが今年二度も重なり、戦後七〇年の巡り合わせではないかと思ひます。



七〇年もたてば、当時の体験を語る方が高齢化し、戦争の体験者がいなくなります。戦争を知らないものばかりになると、また同じ過ちを繰り返すことになりかねません。それが浅はかな凡夫の思考回路です。無明煩惱は必ず地獄を作ります。安倍首相はこの程、これほど国民が反対し、その上学者も識者もみながこぞつて反対しているにもかかわらず、安保法案を強行採決しました。戦争を知らず、体験もしておらず、自分は行く気もなく、その上、人の話しも聞かないのですから手の付けようがありません。また国会の中には、自分たちがもう一度戦争をすれば勝てるはずだと思つている人もいます。先輩への尊敬のかけらもありません。青木先生の言われた通り日本は大変危険な状況であることは誰しも感じて居る事だと思ひます。それぞれができるところでその歩を止める行動をしたいものだと思います。前住職は自身の戦争体験を原点として、仏教がどのような

な生き方を教え、親鸞聖人のお伝えくださった信心が私の人生にどう生きるのかを、常に身にかけて問い続けた一生でした。そしてそれは仏教の不殺生(殺すことなかれ)の教えと、兵戈無用(兵隊も武器も無用の世界)こそが仏の教えであり、私

坊守の記

暑中お見舞い 申し上げます



大変な猛暑ですが、夏と言へば、皆さんは何を連想されますか？私は幼稚園のお泊まり保育のスイカ割り、花火ですが、もう一つ大仕事。畑とお墓の草取りです。(梅雨の間に元気に育つた野草ですが、ごめんない。)先日お墓に草取りに行ったときのこと。足下の野草たちの中でひとときわ目立った草がありました。それは黄色いコスモスに似た花をたくさん咲かせている草？(花?)でした。花を咲かせているので抜くのがためらわれましたが、木のように太くなつた茎をもって力を込めて抜きました。

ちが求める世界だといひます。煩惱具足の凡夫とは実は恐ろしいものです。仏の智慧によらなければ、この世もあの世も地獄でしかありません。どうか浅はかな煩惱によらず、仏の智慧によつて生きる、信心の人が増えることを願うことです。

しかし後で気になつて、その花のことを調べてみると、オオキンケイギクといつて、北米原産の多年草だと言ふことでした。日本に入つてきたときは、花の苗が売られてたこともあつたようですが、あまりの強靱さのため、在来の野草を駆逐し、辺りの景観を一変させる程のもので、外来生物法特定外来生物に指定されて、栽培を禁止されたようです。最初は好まれて、育てられたのに、強さゆえにうとまれていくのです。花には罪はないのに、なんだかわいそうになりました。野に咲く花でさえ、人間の都合で優劣を付けてゆく、人間の身勝手さにはあきれます。人間はもつと自然に対して謙虚にならなければ、いつかこの地球に住み続けて行くことは出来なくなるだろうと思つたことです。(信樂徳子)

安楽寺法要案内

| | | |
|-----|--------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 九月 | 前住職一周忌 | 信樂峻磨前住職一周忌法要 日時 9月26日(土) 13:00 講師 龍谷大学教授 鍋島直樹師 講題 限りなきいのち 『お念仏のしずく』を頂いて |
| | 十月 | 顕真永代経 日時 10月18日(日) 朝席10:00 ~ 昼席13:00 ~ 講師 島根 誓立寺 朋澤智弘師 講題 凡夫 |
| 十一月 | 報恩講 | 日時 11月15日(日) 朝席10:00 ~ 昼席13:00 ~ 講師 吉田 善立寺 松林行圓師 講題 いのちの道 |
| 十二月 | 涅槃会 | 日時 12月12日(土) 朝席10:00 ~ 昼席13:00 ~ 講師 湯来 最広寺 中村英龍師 講題 心の扉が開かれる |



暮らしの中の仏教語 『あいきょう』

「男は度胸、女は愛嬌」とか「愛嬌をふりまく」など、愛嬌といへば、にこやかでかわいらしいことや、愛想のよいことを意味する言葉として知られています。

この愛嬌は本来「愛敬」と書き「あいぎょう」と読んで仏教語でした。愛し敬うことを意味したので、愛しや菩薩の容貌は温和で慈悲深く、拝む人たちが、愛敬せずにはおられない

い相を表しておられるので、その相を愛敬相といひます。愛敬は、その愛敬相から来たものなのです。

また、「愛想がよい」とか、「愛想が尽きた」などと使われている愛想という語も、本来は「愛相」で、そのもとは同じ愛敬相から出た語のようです。同じ愛敬相から、愛敬と愛相とが生まれ、それが愛嬌と、愛想となつていったようですが、いずれも、もとは仏さまのお顔の相だったようです。

あなたをへふるさとへ

呉市長迫国民学校の 浄蓮寺集団疎開から 七十年

(座談その二)

疎開とは？

元々は軍事用語で集団行動している部隊を分散させて攻撃目標になりにくいようにすること。それを第二次世界大戦時下の日本では戦禍に巻き込まれる恐れのある非戦闘員や産業を田舎へ移動させることにも使う言葉となりました。



小島桂子さん、北川弘子さん、桐山清子さんにも協力いただきました思い出を語っていただきました。米山の清老綾子さん、兼持の岡崎頼信さんと住職の三人で呉の安楽寺様でお話を伺いました。

疎開前後の状況



昭和二十年三月十九日に呉の海軍施設に空襲がありました。五月五日広の工廠空襲、六月二十一日には呉工廠空襲、七月一日には呉市街地空襲、七月二十九日には最後の爆撃。

四月十日第一次の疎開。

六年生十六人、三年生九人が朝九時に呉を出て八本松駅に着きました。雨が降っていました。三年生は荷車に乗って行きました。暗くなってから浄蓮寺に着き温かいご飯をいただいて涙が

出るほどうれしかった。その後六月六日第二次、七月十九日第三次と疎開してきました。

志和での生活

本堂の余間に棚を作って荷物を収めました。荷物は行李ひとつでした。布団は親が運んできてくれました。夏は蚊帳を持ってきて吊りました。

朝起きたら掃除してご飯の前と夕方に御院家さんと正信偈などのお勤めをしました。お勤めの後は生活に役立つ話を聞かせていただきました。子どもたちは初めは呉の続きで防空頭巾を肩へかけて鉄力ブトを背中にかけて学校へ通いました。そのうち空襲警報も鳴らないので持ち物入れに入れたままにな



りました。学校への行き帰りは軍歌を歌いながら歩きました。

呉では空襲警報がいつ出るかわかりませんでした。志和では夜ゆっくり寝られるのがよかったです。

朝早くから村の人が仕事をしていたところを学校へ通いましたが中々「お早うございます」という挨拶ができませんでした。朝も夕方も「お早うございます」でした。遠くで農作業をしている人や知らない人にも大きな声であいさつができないと疎開の先生は挨拶をせんと言われ習慣の違いを感じました。

授業が終わった後仕事をし、帰るのは四時過ぎでした。学校への行き帰り山道にいろいろな花が咲いていてその時が安らぎでした。

原爆の日



し足りないこともあったがよくやりました。

七月一日呉市街地空襲。当時長迫国民学校は三棟あって二千人ぐらい生徒がいました。兵舎と思われたのかもものすごい数の焼夷弾が落ちたそうです。二日か三日が面会日だったのを楽しみにしていたのに延期になってしまいました。

浄蓮寺に疎開していた子の家は無事でしたが光源寺の子は親が亡くなりました。西蓮寺の子は両親が亡くなりました。

横穴防空壕を掘って逃げていた人が煙を吸って多くの人が死にました。

地下壕も掘りましたが何の役にもたちませんでした。村の手伝いについて



田植えを手伝おうとして

も手伝おうとしてもやったことがありません。客土(六田)に他の土を入れる)をする。と疎開の子も手伝いに行っただけと力がなから運べないし、男の子は三年生。疎開の子供は役に立たないといわれ、終りごろは疎開の子は遊んでばかりいると言われ情けなかった。友達もなかなか出来ませんでした。終りの頃、何か周りの人に少しでも喜んでもらおう、恩返ししようと思いを練りました。皆で歌や踊りを練習して夜、近所の人を呼んで観てもらいました。呉から来ていた「林のお母さん」と呼ばれていた寮母さんが振付をしてくれました。林さんはよく清老さんの家に行っていて話をしていました。私(青木先生)は近所の人と親交を深める余裕がありませんでした。

八月六日から休暇を取って帰る日、八本松の駅にいた時、原爆が落ちました。駅員さんが山へ逃げろというので逃げました。学校では朝礼の時間で、並滝寺に行く日でした。一機だけでおかしいと思いましたが音感教育を受けていたからB29だとわかりました。大きな音がして何事かと思いました。朝日が当たってきた。朝日が当たってきた。弾薬庫が爆破したのかと思いました。汽車に乗ったが瀬野で降ろされて海田まで歩きました。途中原爆に遭った人に会いましたがながあつたのかわかりませんでした。大やけどをした人と出会いました。そのあと坂まで歩いて呉に帰りました。

十五日に志和に帰ってラジオのこと(玉音放送)のことを御院家さんに聞きましました。気が抜けて泣きました。

(岡崎さん談)警戒警報の時は学校へ行っても良かった。七時五十分学校へ行くくとB29が飛んできて空襲警報になって家に戻った。また警戒警報になり学校へ向かいまた空襲警報になった。B29が時間調整をしていたのでしよう、生城山の向こうから東を旋回して来ました。八時一〇分ごろから朝礼がありその間に生城山の向こうに鬼雲が見えた。先生が隣の村に爆弾が落ちたと言った。鬼雲の近くに落下傘が降りてきた。敵が降りてきてやられると思いました。



(つづく)